

平成の感覚 生々しく

自分だけの物語求める男女

文芸月評

平成とは、どんな時代だったのか。辻原登さん(74)の長編『己どもえ』(中央公論新社)は、小説の形を取った一つの時代論だ。平成社会の「アップミッドル(中流上位)層の男女の心のうつろいを通して、現代につながる日本の混迷を浮かび上がらせた。

偽装事件、北朝鮮の核実験、施表明な現実ที่เกิดขึ้นた出来事が扱われる。

この書は、『許されざる者』をはじめとする著者の過去の代表作に富む長編と明らかに違ふ。やがて、物語が過度の熱を帯びるのを嫌うようなこのスタイル自体が、平成の表れたと気がかされる。

豊かな社会に向かった戦後の昭和は、日本と自分の成長が重なり合うような「物語」



辻原登さん



北野道夫さん



山田昌弘さん

を自分の胸の中に感じ、他者とも共有できた。それに対し平成は、経済が停滞して社会の流れが見えにくくなり、自分の行動がまるで何かが「切れ端」のように、どんな意味を持つかが分からなくなった。

辻原さんは場面の断片を積み重ねることで、その感覚を生々しく描きだしたのだ。

人間とは、自身の支えとなる何らかの物語を胸に持たなければ、不安で生きられない存在でもある。だから本作の男女はみな、己の形にも、己の形にも、愛欲がうすま

く欲しい世界へ飛び込む。誰か欲しい、求められているという自分だけの物語を得ようとする。哀しくもがくのである。

一方で、情報通信や科学技術が発達する令和は、人間がスマートフォンを通して個別に必要な情報や楽しみを得るようになり、社会の断片化が一層進む。同時に人々の間では、人工知能(AI)などの急速な進展により、人類とは科学技術に支配されようという恐怖の「物語」が広く蔓延しつつあるように見える。

北野道夫さん(35)の「予測A」(すばる)は、この現代

の気分を映す一編だ。人工知能を使った「クロール」なる存在が、人間の生活の細部や無意識の意思決定に入り込む社会。勤務先が買収した会社の事実上のリストラに携わる38歳の男の察察とした日々が切れ切れに描かれる。

自分が考え、取ったはずの行動が、自身の頭を通して出てきたものだとは信じられなくなつた人間の荒廃を灰色の筆調で書き留めた。

島田雅彦さん(38)の「スーパーエンジェル」(群像)も、人工知能の最終到達点の量子コンピュータである「マザー」が、ナノチップを皮下に埋め込んだ人間を支配する「AIストリア(反理想郷)社会を創造してみせる。科学を制御しきれなくなることへの人間潜在的な恐怖心は、今後そのほか、(気鋭の女性2人

の作品にも心を吸い寄せられた。小山内薫さん(74)の「花子と桃子」(すばる)は、駅ビルの中のセレクトショップに勤める2人の女性の話だ。女同士につきまとう距離感の取り方の悩みが、容姿や瘦身願望の問題を絡め、丁寧にすくい取られていく。

山下紘加さん(26)の「ワロス」(文芸春秋)は、女装願望に目覚めた既婚男性が主人公。女らしい格好にのめり込む傍らで、この姿を妻が見ても許してくれるのではないかと考える男の甘さは、あっさり打ち砕かれる。真の荒野に彼が放り出されてからの展開に山場があった。

岡本学さん(47)の「アウア・エイジ」(Our Age) (群像)は、自らの青春に決着をつける男の姿を淡い叙情ととも刻んだ。

村上文学の多様な研究

2018年に日仏で行われた二つの国際シンポジウムの成果をまとめた石田仁志、アントナン・ベジュレール編著『文化表象としての村上春樹』(青弓社)が刊行された。作品論、映画や教科書との関係など、村上文学研究の多様さが改めて分かる。

22本の論文の中では、海外の日本文学研究者の視点が新鮮で目をひく。ロンドン大のステイブン・ドッド名誉教授は、永井荷風をはじめ日本の近代文学に重要な役割を果たしてきた「影」のイメージが、村上さんの『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』などに見られると説く。リール大のブリジット・ルフェール准教授は、グリム童話の「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」などに、暗く危険な場所として森が描かれていることに言及したうえで、『ノルウェイの森』について論じた。

ぼく 全てのひととでまじり

第16回直木三十五賞の受賞者は、ぼく、川越宗一である。

事実なのだが、書いてみる和不遜極まりなく感じるし、気恥すかじまぬ身が縮むような気持ちになる。それはぼくとしても、端的すぎて不正確な表現のようにも感じる。

ぼくは歴史小説を書くとき、史実の裏面を自分のキャラクターに換骨奪胎し、適された記録や伝聞を寄せ集めて作った作品世界に放り込む。ぼくはたがら文藝術が気絶にしか見えない執筆という行為を続け、作品がさまざまなできごとを批判されたり反射的にムツクさへうらむには大

直木賞に決まって 川越宗一



くが小説の材とする史実は、当たり前だがぼく自身の行為ではない。だから作品のすべてをゼロから創作したわけではない。

話を広げてみる。ぼくが小説を書く際に使っている日本語が、ぼくの発明ではない。

小説という形態も、批評や賞といった作品鑑賞を味い深くする仕組みも、ぼくの発明ではない。継続的な執筆のため小説も、執筆を依頼してくる出版社さんも、小説を求めてくれる社会やそこにあら

れる読者も、その誕生にぼくは関わっていない。

ぼく個人だつて、草を道々で食みながら寄り道や迷い道を続けつつ、出会った人に助力や転機をもらいながらなんとかやって来た。両親

き集めて、一般的なものがあまりに情な自我をまがしたのが、ぼくだ。小説を書くに、思ったのは自分の意識が、たたく先生の先行作品がメール添削の先生に学んで作家デビューし、担当編集のかたに伴走してもらって、作品を刊行し、それを世に届けるために横々なたの努力を、一方的に頼っている。

と書いて、卑下するつもりはない。自慢話や説教をするおじさん(ぼくも年齢的にはそうだが)に遭遇するたびに面倒を感じるけれど、そのおじさんより面倒になるくらいには、自信を持っている。

だから再び書か、第16回直木三十五賞の受賞者はぼく、川越宗一である。ただ川越宗一とは、ぼくを川越宗一としてくれた、歴史時代



井上靖

1960年のノーベル文学賞の候補だったことが分かった井上靖